

猪 1 8 不思議な狩人 = = = 猪・鹿・狸より

山で狩りなどしていたものの中には、平地の人々が想像も及ばぬような、不思議な官能や経験をもった人物があった。つい近頃聞いた話などもその一つである。実は不猟続きに弱り込んだ狩人たちが、何処からか聞き出して頼み込んで来たのが最初で評判になったと言うた。まだ四〇代の体の小締りに締ったと言うほか、格別見たところ変ってもいなかった。ただ不思議なことは、山へ入ったと思うと、猪のいるいないがすぐ判ったそうである。鼻で嗅ぎ出すのだろうとも言うたが、話の様子ではそればかりでもないようだ。それについて、自分の知っている狩人の一人が言うたことがあった。猪の後を求めて菌朶を分けて行く時など、今の先、猪が通ったと言うようなことが、ふっと胸に浮かぶのがほとんど間違いなかったと言う。そうした官能の働きか、所在を知ることは驚くほどの確だったそうである。しかも山を跋涉することの自由自在で、少しも倦むことを知らぬには、一緒に狩りをしたものが、いずれも舌を捲いたと言う。心持上半身を前屈みにした中腰の構えで、頭を前に出して小股に歩いて行く様子がまことに尋常でなかった。如何な茨のボローの中でも、たちまちくぐり抜けるにはとても真似など出来なんだと言う。犬千代と言う渾名（あだな）があると言うから、千代何とかの名前らしいが、遇った訳ではないから詳しいことは判らない。北設楽郡カワテとかのものとはだけは聞いた。獣のことや猟の方法など、何から何まで気持ちのよいほど知っていたそうである。狩りを済ますと同時に、三日ほどいただけで、何処かへ去ってしまったと言う。お陰で頼んだ狩人たちは、思いのほか獲物があった。何なら毎年頼みたいと言うたとも聞いた。あまり珍しいから、いろいろ噂を訊いてみた。

生家は村でもかなりな家柄だそうである。相当教育もあって、村長ぐらいは出来るなどと言うた。ただ持って生まれた病と言うのか、狩りをしたり、魚を捕ることが好きなために、家にもいつかれないで、方々を渡り歩いているという。いたって仕事が嫌いで、宿屋を泊まり歩いていると、一間に閉じ籠もって朝から酒ばかり飲んでいて、宿銭が溜まった時分に、釣の道具を持って、ふいと出て行ったと思うと、晩方にはびっくりするほど、鰻を捕って来たそうである。それで払いを済ますと、また暫くは遊んでいたと言う。魚に不自由な、山の中の宿屋などでは重宝がった。ただ長くいつかぬので困ると言う。鰻などは一日に三貫目も提げて来たことがあったそうだ。鯉なども、何処から提げて来るかと思うほど、速く捕って来たと言うが、どうして捕るかなどと質問すると、ふっと無口になって、話そうとしなかったそうである。鰻にしても鯉でも餌で釣っていたことは確かであったと言う。何だか悉く信じられぬような点もある。

時とするとまだこんな人がいたのである。猪とは縁がないが、以前狂言の振

付をして、村から村を廻っていた相模屋某と名乗る男なども、変った男だった。地狂言がなくなってからは、浄瑠璃を語って、村々を廻っていた。もちろんそれだけでは生活が出来ないので、冬は小鳥を捕り夏分は鰻を釣って渡世にしていた。鰻など捕ることは実に巧妙だったと言う。今日は何百目欲しいと注文をすると、晩方にはきっとそれだけの魚を提げて来たそうである。